

情報構造と There 構文

On Information Structures and There-constructions

内 田 恵

Megumi UCHIDA

（平成10年10月5日受理）

0. はじめに

機能主義からのアプローチは生成文法における形式主義的な分析では十分に説明しきれない言語事象を補完する形で説明することで発展してきた。生成文法に比べて道具立てが複雑ではないという利点があり、より言語使用に力点を置いている特徴がある。しかしながら、new-old information、theme-rheme、topic-comment、focus-presuppositionなどの概念がややもすると漠然としたものになってしまう。これは談話や文脈などを重要な研究対象にしている以上仕方がない面もあるが、改善してゆくべき点の1つである。また、生成文法の柱となる形式統語論の不備を補うという作業は、どこをどの程度まで進めてゆくのかというすみわけを考慮する必要がある。本稿では移動の方向性と情報構造を新しくとらえることにより、情報構造の定義そのものについて検討を加える。さらにいわゆる有標構文の分析に機能主義的分析がどのようにかかわってくるかを論じてみる。1節では新・旧情報の二項対立による分析の不備を指摘して、複合した要素が相互作用することによって情報構造をとらえるべきことを見る。2節では要素が移動されて派生する有標構文について考察する。特に要素の位置と情報のステータスの間に強い相関性があることを示し、有標構文の微妙な類似点と相違点及び要素の移動要因について考察したい。3節では2節で見た構文の中から特に there 構文を取り上げて、形式主義と機能主義の観点から検討する。

1. 情報構造再考

1. 1. 二項対立的分類

情報構造を研究するさい不可欠な道具立てに、旧情報(old information)と新情報(new information)という対立概念があり、従来はおおむね次のように定義されてきた。

- (1) 旧情報…発話するときに聞き手の意識の中に既にあると、話し手が仮定している情報
新情報…発話によって聞き手に新しく与えられると、話し手が仮定している情報

英語においてこれら2種類の情報は、原則として「旧情報—新情報」の順序で配列されることになる。しかしながら、すべての場合にこの原則がそのままあてはまるのではない。そのへんの事情をまとめた(2)と具体例(3)を見てみよう。(＃は容認不可能であることを示し、非文法的

とは区別する。)

- (2) a. OLD-NEW b. NEW-OLD c. NEW-NEW d. OLD-OLD
 e. #OLD-NEW f. #NEW-OLD g. #NEW-OLD

(3) A: Who did you give the book to?

B: a. #I gave the book to Mary. (2e)

b. #I gave Mary the book. (2f)

(4) A: Where did John buy the book?

B: a. #In Tokyo John bought the book. (2g)

b. In Tokyo John bought the book.

(3a)は対照強勢が旧情報に置かれているので容認度が落ちる。(3b)は新・旧情報の配列も通例とは逆であり、対照強勢が旧情報に置かれているので同様に容認度が落ちる。また(4a)は対照強勢が置かれていなければ、新・旧情報の配列違反になる。このように、旧情報に強勢が置かれることはないということ、新情報に強勢が置かれた場合は例外として、そうでない場合には「新-旧」の順序は許されないことがわかる。

1. 2. 旧情報の細分化

情報構造を二項対立的に分類することには単純明快さはあるが、実際の談話を分析するときには一筋縄ではいかないことが起こる。特に旧情報の分類にはもっと細かな点に注意を払うべきであるという提案がPrince(1981)でなされた。それによれば、旧情報を(i)shared、(ii)salient、(iii)predictableの3つのタイプに細分化している。

まずsharedとは、(i)先行文脈ですでに明示的な形で情報が与えられているものをさして言う場合、(ii)特定の発話場面にそれが存在する場合、(iii)経験などからそれが一般知識になっている場合の語句を意味する。(1)の旧情報におおむね該当すると思われる。

次にsalientという概念を(5)と(6)の例で見よう。

(5) a. We got some beer out of the trunk. *The beer* was warm.

b. We got some picnic supplies out of the trunk. *The beer* was warm. (Prince 1981)

(5a)は第1文すなわち先行文脈においてsome beerという語が出ているので、第2文のthe beerはsalientである。これに対して(5b)の第1文ではbeerが意識内にあるとは考えにくいので、第2文のthe beerはnon-salientである。sharedの中で(ii)の要素を必ずもっているのがsalientであると言える。

3番目にpredictableについて考えてみよう。Prince(1981)によれば文中の特定の位置にある項目が生じることが聞き手に予測できるような場合をいう。これは省略可能性と相関関係にあるという。

(6) a. Mary paid John and *he*/* ϕ bought himself a new coat.

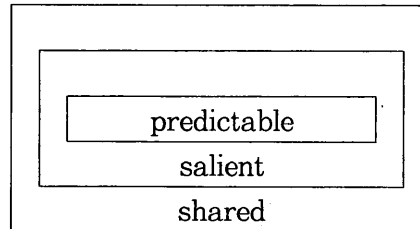
b. John paid Mary and *he*/ ϕ bought himself a new coat. (ibid.)

(6a)の*he*は省略すると非文となる。これは先行文脈から予測できないのでunpredictableすなわち新情報になり、反対に(6b)の*he*は省略可能であるのでpredictableであると言う。

以上をまとめると、ある項目が発話時にその文脈において話題になっているならば(predictable)、それは聞き手の意識内に存在することになり(salient)、また聞き手の意識内にあるならば必然的に聞き手にとって既知の項目(shared)となる。成田(1983)によれば一定の包含関係が存在して、(7)のように図示される。¹

(7)

predictable \subset salient \subset shared



しかしながら、このような旧情報の細分化は個々の事象の説明には役立つもののあいまい性は増幅してしまう。まずpredictableと省略の関係は情報構造だけで(6)のように一義的に説明できるとは限らない。具体的明示物が談話あるいは文脈内にあるかいないかという分類を包含関係で結び付けるのはあらたな二項対立の分類を設けることになる。さらに新・旧の対立を基本にしながら旧情報の細分化に対応する新情報の細分化がはっきりしない。このようなあらたな問題を解消するような分析を次の節で検討してみよう。

1. 3. 複合的な基準による分類

Prince(1992), Birner and Ward(1998)は、(i) old(新) vs. new(旧), (ii) discourse(談話) vs. hearer(聞き手), (iii) relative(相対的) vs. absolute(絶対的)という3種類の対立概念の基準を設定してそれを複合的に関連させて情報構造を分析している。この考え方はまず、(i)と(ii)の組み合わせで情報構造を4種類にタイプ分けする。前提となるのは従来の新・旧情報の対立を聞き手中心の分類と(先行)文脈中心の分類に分割している点である。²

(8) a. hearer-old, discourse-old

談話が成立する時点ですでに前もって引き出すことができ、かつ聞き手がすで知っているものと話し手がすでに信じている情報

b. hearer-old, discourse-new

談話が成立する時点ですでに前もって引き出すことはできないが、聞き手がすで知っているものと話し手がすでに信じている情報

c. hearer-new, discourse-new

談話が成立する時点ですでに前もって引き出すことはできないし、聞き手がすで知っているものと話し手がすでに信じていない情報

d. hearer-new, discourse-old

談話が成立する時点ですでに前もって引き出すことはできないし、聞き手がすで知っているものと話し手がすでに信じていない情報

これを具体例で検証してみよう。

- (9) Last night *the moon* was so pretty that I called *a friend* on the phone and told *him* to go outside and look. (Birner and Ward 1998)

*the moon*は先行文脈からは引き出すことはできないが、聞き手にとっては既知であると話し手が仮定している情報なので(8b)に匹敵する。*a friend*は先行文脈から引き出すことはできないし、聞き手も既知であると話し手が考えることもないので(8c)に該当する。そして*him*は(8a)に当てはまる。またPrince(1992)によれば(8d)は談話上存在しない。

前述の(iii) relative(相対的) vs. absolute(絶対的)は情報構造によって移動構文を分析するのに、規則や制限が相対的なものになるか絶対的なものとして作動するかを考えるものであり2節および3節で検討する。まず2節では1.3の考え方をを用いて移動構文を分析しているBirner and Ward(1998)を紹介する。

2. 移動の方向と情報

1節では情報構造の分析にまつわる3種類の提案を見てきたが、2節では具体的な構文、特に移動構文を検証することで妥当性を分析してみよう。移動の方向性のタイプによって「前置構文(preposing)」、「後置構文(postposing)」、「要素入れ替え構文(argument reversal)」が取り上げられ、その相互関係を論じる。ここでいう分類は移動等による派生形という意味だけではなく、表層の位置関係に基づいた類型化でもある。

2. 1. 前置構文

まず前置構文としては「話題化(topicalization)」、「焦点前置(focus preposing)」、「左方転位(left dislocation)」があり、これらの分析には「焦点と前提」が深く関係する。(10)の談話は話題化の例である。前提となるスポーツとの関係から聞き手Bはbaseballを話題として前置し、焦点になるのはbetterである。

- (10) A: Do you watch football?
B: Yeah, *Baseball* I like a lot better.

これに対して焦点前置構文では先行文脈と関連性の強い要素が前置され、強勢が置かれてそれ自体が焦点となるという違いがある。

- (11) I made a lot of sweetbreads. *A couple of pounds* I think I made for her.

さらに元の位置に代名詞を残す左方転位構文は、前置要素が談話に関する旧情報のみならず新情報も担うことがあり、その場合は先行文脈との連結関係はあまりないと言える。

- (12) *The landlady*, she went up and he laid her out.

2. 2. 後置構文

右方向の移動として位置づけられる後置構文として「there構文(there insertion)」と「右方転位構文(right dislocation)」がある。there構文は後置要素がいわゆる新情報を担っているのに対して右方転位構文は旧情報を担う要素が移動する。

(13) I can't stand *him, that guy*.

there構文は新情報の位置へ意味上の主語を移動して派生した構文と考えられ、「提示型(presentational)」と「存在型(existential)」に細分化される。(それぞれの詳細な特徴については3節で見てゆくことにする。)

(14) There came a moonlit night when they started their journey at evening, having slept during the day.(提示型)

(15) A: I'm home. Anything interesting happen today?

B: Not really. There's a dog running loose somewhere in the neighborhood.(存在型)

(Birner and Ward 1998)

2. 3. 要素入れ替え構文

次の「倒置構文(inversion)」は左右両方向へ同時に要素を動かす用例の1つである。

(16) She got married recently, and *at the wedding was the mother, the stepmother and Dabbie*.
(ibid.)

(16)のthe weddingは談話における旧情報を示すので前置され、反対に後置された要素は新情報を担うのが通例である。しかし後置された要素が談話における旧情報を担うこともあり、その場合には後置要素は前置された要素よりも先行談話との親密性の度合(familiarity)が低くなる。また受動態の主語とby句の関係についても単なる新・旧情報の標準的な配列というよりも、原則的に先行談話に対する親密度のより高い情報がより低い情報の前に置かれると言い換えたほうが、幅広い現象をもとらえることができる。このように両方向の移動がかかわる構文では、情報構造にまつわる制限が絶対的(absolute)なものから相対的(relative)なものに緩められることになる(1.3節参照)。

3. there構文の文法

2節では機能主義の立場から移動構文の特徴についても触れてきたが、3節では右方移動の1つであるthere構文を詳細に考察することで、生成文法を中心とした形式主義の立場と機能主義的立場の接点およびそれぞれの守備領域について検討をしてみる。

一般的にthere構文には(17)のような基本的特性があるとされている。

(17) a. 文法的な主語の名詞句としてthereという虚辞の名詞が生ずる。

b. be動詞の直後の意味上の主語は不定名詞句である。

c. 述語動詞は典型的にはbeである。

(鈴木・安井 1994)

3. 1. there構文の派生

生成文法では主語のNPがbeの直後に移動され、空になった主語の位置にthereが挿入されてthere構文が派生すると考えられている。³ 書き換え式にまとめると(18a)から(18b)が導かれることになる。

(18) a. NP (AUX) be X → b. there (AUX) be NP X

このことはthere構文の動詞のあとに要素が続いても(18a)と(18b)には意味的類似性が維持されることから妥当であると主張される。Xの部分に要素がはいっている具体例を見てみよう。

(19) a. Some children have been playing in the yard.

b. There have been some children playing in the yard.

(20) a. Few students are entirely without means of support.

b. There are few students entirely without means of support. (鈴木・安井 1994)

(19)は進行形でありplaying in the yardがXにあたる。また(20)は状態を表していてentirely without means of supportが同様にXにはいる。したがって意味的類似性のみならず形式的類似性があるのは明らかである。ところが次のように(18)のような派生ができない例もある。

(21) a. *A Santa Claus is.

b. There is a Santa Claus.

(22) a. *Many reasons for believing this are.

b. There are many reasons for believing this. (ibid.)

(21)や(22)は基底構造が非文であり、(18)を仮定すれば正しい派生はできない。(21b)や(22b)は基底から直接派生するなどの考察が必要になってくる。また対応関係が一見認められるようでも、there構文の派生が許されない例もある。

(23) a. A few photograph were very dark.

b. *There were a few photograph very dark.

(24) a. Some students might be hungry.

b. ?There might be some students hungry. (ibid.)

すなわち、there構文はその派生で何かしらの制限があることと、変形論的立場では基底構造が存在しない文が出てしまうという不備があることがわかる。

3. 2. there構文に現れる動詞の分類

3. 1 ではbe動詞型there構文を例にあげていたが、there構文に現れる動詞はbe動詞以外の

場合あり、Milsark(1974)によればそれは2種類に大別される。

- (25) There remain some problems in this regard.
 (26) There stood on the table a lamp. (Mirsark 1974)

(25)を「主語内部動詞存在文(outside verbal existential sentence)」、(26)を「主語外部動詞存在文(inside verbal existential sentence)」と呼ぶ。主語内部動詞存在文は次のような「存在」、「出現」、「移動」をあらわす動詞が使われる。⁴

- (27) exist, dwell, hang, live, remain, stand, survive, etc.(存在)
 appear, arise, develop, emerge, happen, return, etc. (出現)
 arrive, come, enter, go, run, etc. (移動)

これらの動詞は拡大解釈をすれば、「存在+ α 」の動詞であると言える。また、これらは自動詞用法ばかりであるという特徴がある。これは他動詞構文は主語の動作や行為を記述することが目的であり、存在をあらわすthere構文の目的と相いれないからであると思われる。

他方、主語外部動詞存在文は興味深い単語の配列をするという点で主語内部動詞存在文と異なる。すなわち、意味上の主語である(28)のa unicornや、(29)のa flogが文末へ後置されている。

- (28) There walked into the bedroom a unicorn.
 (29) Thereupon, there ambled into the room a flog. (ibid.)

さらにMilsark(1974)によれば、主語内部動詞存在文との顕著な違いは、(21)や(22)でわかるように 意味上の主語についての制約がないということが上げられる。すなわち定名詞句が意味上の主語になることができる。また主語外部動詞存在文と主語内部動詞存在文は従属節において次の例のようなふるまいの相違も見られる。

- (30) *The driver regrets there stepped out in front of his car a pedestrian.
 (31) I regret that there are many problems in my proposal. (ibid.)

(30)で明らかなように、断定的な述語が必ず来なければならないregretタイプの動詞の補部に主語外部動詞存在文が起こることはできない。一方この制限は(31)からわかるように主語内部動詞存在文にはない。

3. 3. 情報構造とthere構文

there構文を情報構造の観点から分類してみると「存在型(exsistential)」と「提示型(presentational)」に二分される。3.2で見た主語内部動詞存在文が存在型に、主語外部動詞存在文が提示型におおむね相当する。Prince(1992)によれば、存在型there構文はhearer-newであるので不定冠詞が使用されるのが 通例である。これを1.3節の(8)における複合的な情報構造分析を当

ではめると次の表のようになる。

(32)

	hearer-old	hearer-new
discourse-old	存在せず	
discourse-new	提示型OK 存在型#	提示型OK 存在型OK

すなわち、談話に関して新情報であるが聞き手にとって旧情報であるような要素の後置は、提示型there構文では問題ない。しかし存在型there構文では、例えば(34)のように聞き手にとって旧情報であるPresident Clintonの後置は容認できないことになる。

(33) I have some interesting news for you. *At today's press conference there appeared President Clinton.* (Birner and Ward 1998)

(34) I have some interesting news for you. # *At today's press conference there was President Clinton.* (ibid.)

このようにかなり微妙な容認可能性の揺れを(32)の表を使って説明することができる。

4. 結びにかえて

本稿では従来の新・旧情報を用いた情報構造の説明方法に異議を唱え、2つの新たな分類についての提案を検討した。2節と3節では機能主義と形式主義の立場から移動構文をながめてきた。特に3節では2種類のthere構文の特徴を統語的な面と機能的な面の両方から探ってみた。今回は荒削りな推測の域ではあるが、Birner and Ward(1998)の提案に沿った分析が一番優れているように思われる。その傍証として次の例を見てみよう。

(35) a. I wonder what's going on. A police car is parked in front of the William's house. *In the back seat is the mayor.*

b. I wonder what's going on. A police car is parked in front of the William's house. # *In the back seat there's the mayor.* (a-b, Birner and Ward 1998)

(35a)の倒置構文は談話に関する新情報であるthe mayorが後置されているので、それが聞き手にとって新か旧かは問題にしない。他方(35b)は存在型there構文の場合で(32)で見たようにthe mayorが談話における新情報であるとともに聞き手にとっては旧情報であるので、容認できないことになる。これは左右両方向の移動が関与する倒置構文では制約が相対的なものであるのに対して、there構文など後置構文に関与する制約は絶対的であるという差異に起因する。

さらにこの考え方は次の例も説明する。

(36) In a little white house lived two rabbits.

(37) # In a little white house two rabbits lived. [discourse-initially]

(36)の倒置構文も(37)の話題化構文も談話における新情報が前置されてはいけないという制約がある。しかし、倒置構文(36)が可能なのは当該の2つの要素が両方とも新情報である場合はこの制約が相対的なものになり、前置要素は後置要素より先行談話との関係から相対的に旧情報扱いになるからである。これに対して制約が絶対的である後者では(37)が容認不可能であることになる。このように容認可能性の差異を説明することが困難であった3種類の移動構文を、すっきりとした形で分析するには1.3で見た方法が一番妥当であるように思われる。

今後、この考え方を発展させて素性分析のような形にまとめあげてゆくことと、冠詞と情報構造との関連でいわゆる「定性効果(definite effect)」の必要性について考察してゆきたい。

注

1. 成田(1983)で提案された図を参考にしている。
2. Birner and Ward(1998)に述べられていることを要約し箇条書きにしたものである。
3. Stowell(1978)は次のような派生を提案している。
 - (i) [e] was [e] being [a man][nasty to me]
 - (ii) [e] was [a man] being [t][nasty to me]
 - (iii) [there] was [a man] being [t][nasty to me]
 この分析では[a man][nasty to me]と考えられている。
4. 鈴木・安井(1994)を参考にまとめ直した。

参考文献

- Birner, Betty J. 1996. *The Discourse Function of Inversion in English*. New York:Garland.
- Birner, Betty J. and Gregory Ward. 1993. "There-Sentences and Inversion as Distinct Constructions: A Functional Account". *Berkeley Linguistic Society* 19, pp.27-39.
- _____. 1998. *Information Status and Noncanonical Word Order in English*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Pr..
- Mirsark, G.L. 1974. *Exsistential Sentences in English*. New York: Garland.
- Narita, K.(成田圭一) 1983. 「情報の新旧をめぐる」『英米文学』 第43号, pp.107-135.
- Prince, Ellen F. 1992. "The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information Status" In Sandra Thompson and William Mann(eds.) *Discourse Description: Diverse Analyses of a Fundraising Text*, pp.295-325, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Stowell, T. 1981. *Origins of Phrase Structure*. Ph.D dissertation, MIT.
- Suzuki, H. and I. Yasui(鈴木英一・安井泉) 1994. 『動詞』現代の英文法 8, 東京: 研究社.
- Ward, Gregory and Betty J. Birner. 1995. "Definiteness and the English Existential". *Language*. 71, pp.722-42.